

昭和の南海地震体験談

氏 名: 森 正夫(もり まさお)
生年月日: 昭和 8 年 10 月 1 日
地震を体験した場所: 田辺市
当時の家族状況: 祖母、父、母、弟、姉二人、妹



1) 地震発生時の状況

当時 13 歳家族 8 人で寝ていて、強い揺れで起きた。家の門に出て、揺れ収まるまで一時避難。

近所の人も同じように出ていたが、津波のことを(S19、安政、宝永)知っていた人たちは皆、私の家(高台)目指した。

2) 津波襲来時の状況

「誰が来てない」「誰が遅い」と皆、やきもきしながら避難してきた人を確認し、最後に逃げてきた姉妹は、足を濡らしながら逃げてきて間に合った。

私の、お祖母さんが安政の生まれで、お祖父さんは嘉永の生まれだった、ので、お祖母さんから、安政地震の話を良く聞いたのと、二年前の東南海地震の時、昼頃、学校から帰るように指導されて、海辺を通過して、家に帰らされた、家では、浜の傍の田圃に、津浪が来て、越波しかけたので、「もう少し大きい地震なら、高台に逃げんと(逃げないと)危ない」ことを家族に、教えられた。



<当時の家>

3) 家族の行動・被害

被害なし。避難もせず。

田辺に杜氏の仕事に、ずっと泊り込みで行っていた兄が、被害を聞いて、道は通れず、山越えて、戻って来てくれた。兄から通る道々の状態を聞いた。

4) 集落・周囲の被害

当時、この地区 47 軒のうち 23 軒流出、全壊 15 軒、浸水無しは 9 軒だった。

1 人死亡(姉妹の家に疎開して来た人で 66 歳、一度は小学校の裏山に避難したのに、「荷物を取りに行く」と制止を振り切って戻った。間借りしていた家の納屋で死亡)。

大体の家は、当時皆、平屋建てで、中二階のある家もあった。

自宅の下の段にあった家は、すべて流出。掛かっていた橋も流出。小学校など、公共の建物も流出。

5) 地震・津波後の生活

何より被害の大きかった、家の流失や、全壊した人は、無事な家を間借りして生活した人、学校が流れて、納屋を借りて代用、不便・不自由な生活だったので、村人総出で、今の様に重機も無い時代だったので、1年かけて町内会館を再建した。

最初は自宅が無事だったので、避難の人も家にあった米を食べていたが、次第に米も、無くなってきたので、芋や、水に浸かった米を洗って、おかゆ（粥）にして食べた。

6) 次の災害への備え

S29年に田辺市と村が合併し、開発されて、今の状態になっていった。

全壊した家などは再建したし、流出した学校も再建し、今の山側の場所に、移転した。

避難所にもなる大きな運動公園も出来ている。

自宅も、高台に移転した。当時の家はあるが今は誰も住んでいない。

この土地は、特別被害多かったので、潮位票があちこちに建っている。今、立派な干潟公園が出来ているが、湾の防潮堤が低いので、これを上げないと、次の災害に備えられない。

7) その他

S22年の夏休みもS23年の夏休みも来る日も来る日も、父に言われて、津波でモジけた（決壊した）田んぼの土手を直した記憶ばかりだ。

<山祇神社・潮位標>



<内之浦町内会館前・潮位標>

